



# けやき

第5号

【校訓】  
自主  
根性  
協同

R5、9、1発行  
文責 光山

## 二学期の目標「相手に届く挨拶を！」

八月二十八日に二学期の始業式を行いました。夏休み中の様々な体験や活動により、生徒たちは一段とたくましく成長し、その姿と表情から、二学期の学校がより一層充実することを確信できる様子でした。始業式では、まず、四人の代表生徒が二学期の目標等についてそれぞれの思いを発表してくれました。その後、校長の話では「うれしかったこと」「挨拶のレベルを上げよう」ということを中心に伝えました。以下がその概要です。

◎【うれしかったこと】

◎【その一】八月二十三日に来校された方が「先ほど、佐敷中の生徒が道路を横断しようとしていたので車を停止しと、大きな声でお礼の挨拶をしてくださいました。それも校門近くだけでなく本町通りでもです。佐敷中の生徒は地域でもしっかりと挨拶ができますね。挨拶をしようとする意識が多くの生徒に浸透していると思いました。すばらしいと思います。」と話してくださいました。生徒の地域での姿を褒めていただけのこと、この上ない喜びです。

◎【その二】今日（始業式）の朝、たくさん生徒が校舎周りの落ち葉などを自主的に清掃している姿がありました。ボランティアの意識を高く持ち、それを実践に移すことができる生徒がたくさんいることはすばらしい、まさに、佐中プライドであり、校長として、そんな佐中生を誇りに思います。

◎【挨拶のレベルを上げよう】

佐敷中の生徒は一〇〇%挨拶をしています。しかし、挨拶はしているけど、相手に届いているのか分からない声だったり、相手の目を見ないで挨拶をしたりする人もいます。挨拶は相手に伝わるものだから、自分がしたと思っても相手に伝わってなければ真の挨拶にならないのだと思います。「相手に届く」という基準で挨拶を考えると、残念ながら一〇〇%できていないように思います。そこで、二学期は「相手に届く挨拶」を心がけてほしいです。私がいつも気持ちいいなあと思うのは、朝の登校時に自転車小屋の奥から、駐車した私の方を向いて大きな声で「おはようございます」と挨拶してくれる生徒がいることです。五メートル以上離れていても相手に届く大きな声で、相手の目を見て挨拶ができる人はすばらしいと思います。そんな生徒であふれた佐敷中に届く挨拶に努めてほしいです。（あとがきに続く）



## 充実した夏休みに！

夏休みに開催された中体連では、県大会、九州大会そして全国大会と貴重な経験を重ねることができた生徒がいました。県大会では、陸上一年男子一五〇〇mで新村君が優勝し、新体操では、個人総合、種目別クラブ及びステイックで二年生木下君が優勝、神崎君が二位となりました。九州大会では、木下君が個人総合二位、クラブで優勝しました。陸上は残念ながら台風のために中止でした。また、クラブチームで出場した相撲は、県大会団体及び個人で優勝し、九州大会では団体三位、三年生吉本君が個人三位となりました。全国大会では団体は決勝リーグ進出、個人戦の吉本君は、予選リーグを勝ち抜き、優勝した選手に敗れたもののベスト十六に入る健闘を見せました。この他、県大会では、空手道女子団体組手と柔道の一年生窪田さん、水泳の一年生岩田君の五〇m、一〇〇m背泳ぎが、それぞれ三位に入る健闘を見せてくれました。中体連ではありませんが、空手道の女子団体組手も熊本県代表として全国大会に出場することができました。

一方、学習や文化的な活動にもたくさんチャレンジしてくれました。三年生は、高等学校の体験入学に積極的に参加し、高校の魅力を感じつつ高校生活への期待と希望を高めることができたようです。同時に自分自身の現在地を確認し、進学に向けて学習に意欲的になった人がたくさんいました。さらに、今年度新たな活動として、中学生による小学生の宿題等の勉強のお手伝いと、町PTAの支援を受けて本校を卒業した大学生による中学生への学習サポートの取組を行いました。ともに、台風や感染症の影響を受けてしまいましたが、参加した生徒や大学生にとって大変好評で、今後継続したい活動となりました。また、福島県の中学生との交流事業である「中学生未来サミット」にも代表生徒三人が参加し、たくさん学びと大きな刺激を得たようです。本人たちにとって貴重な経験ができたと思います。

教職員にとっても夏休みには日頃できない研修の機会がたくさんあり、県教委から講師を招いた授業づくりの研修や人権教育のレポート研修、各教科等の担当者が集まった研修等、自己研鑽の機会がたくさんありました。

### ※夏休みが早く終わると感じるの？

こうして今年の夏休みを振り返ってみると、「休み」という言い方をしてしまいますが、休むのではなく、勉強や部活、スポーツ等、自分の力を高めたり、ゆつくりとした時間を過ごしてエネルギーを蓄えたりするための「充電期間」といえそうです。学校で各教科の授業がないからこそ、得意分野を究めたり、日頃できない経験をしたり、あるいは、静かに自分を見つめ直したりすることができると感じています。様々な活動ができ、充実しているからこそ、夏休みはあつという間に終わると感じるのではないのでしょうか。

あとがき  
始業式で「挨拶のレベルを上げてほしい」という話をしたところ、早速そのことを意識してくる生徒が多数出てきました。私に対する生徒の挨拶の声も大きくなり、離れたところからでも届くような声で挨拶をしてくれる生徒が目に見えて増えました。給食時間のGood jobカードの放送でも「校長先生の話を受けて、相手に届く挨拶をしてくれる人が増えました。話を聞いてすぐに実践できる佐中生がすばらしい」という本校職員の気付きも伝えられました。生徒は毎日、多く人から様々な情報を得ています。それらを自分なりに受け止め、解釈し、或いは行動に移していくことは、その人の生き抜く力の育成につながると思います。そんなたくましく「生き抜く力」を身に付けた佐中生を育てたいと切に思う毎日です。（光）